

注解『七十一番職人歌合』稿（二十八）

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第五十九番および第六十番の注解を取めた。

五十九番 苧売 綿売

〔職人尽〕

〔吾吟我集〕ををうむを見て 女房の取り上げて巻く臍の緒もうみおろしての後のことわざ 〔人倫訓蒙図彙〕綿師 農夫の業としてこれをなす。桑を植へて蚕をやしなひ、つるにそれを煮ころして綿をなすなり。此の作業、おほく殺生なるゆへに、戒律の僧は絹類を身にまとはず。是仏のいましめ也。／ 綿屋 絹布屋に是を商ふ。又は、摘綿とみわたを商ふ所、大方三条通にあり。越前を先として、寒国より是を出だす。／ 綿摘 帽子綿、小袖中人、これをつむ。女の業ながらも老女又は小むすめの所作にて、住所すまどろ閑かにして、なさけありげに、しほらしく見ゆるは此のわざ也。〔和国百女〕ところどころ品こそかはれ、越前布、加賀に八講、越後布縮み、陸奥にしのぶもぢずりの布、明石縮み、近江高宮、奈良晒などとして、名物の布あり。いかの国の片山家までも、賤の女の所作に、麻の苧を績み、奈良のあきんどに売り、代替へて

世渡る稼ぎとする。若き女、小娘は手もしなやかにて、苧を績む事心安しといへども、老いては身にしろしやうもなく、次第に衰へはて、春にはあらねど目もかすみて、細くたをやかならねば、をのがなりに似せをきしへそを取り出だし、紡錘にかけて夜業こそいとわびし。〔詐諧職人尽〕苧売 綿うり 夏引きの其の麻結ぶ襷かなへ木司▽ 髪置きや苧に尾を付ける売り詞へ雪塵▽ 花形に調べの艶やいづれの苧へ淀 等文▽ 紡績の窓や苧売も秋の声へ寥和▽ 箕に干して窓に糊茸くや綿の桃へ孤屋▽ 綿打の是も花より朧にてへ咫堂▽ わたうちの窓は雲なきふぶきかなへ千調▽ 綿うりに化しても白し紙帳売へ寥和▽ 〔職人尽発句合〕四十九番右 綿打 ふうはりと薄わたのごとし春の雪 わたうちが春の雪は、音もなく香もなきものや。〔職人尽狂歌合〕 わた打・わたつみ 卯の花を綿と見立つも面白し打ち出でて聞く初ほととぎす 卯の木垣ひとへに雪とつみわたの耳をひろげて聞くほととぎす 左右、綿をあつかふいとなみにて、ともに卯の花をとり出でて申されし、大方おなじさまにおかしく侍れば、勝負いづれをまさるとも申しがたく侍れど、せめて申さば、右、耳をひろげてといひ、卯の木垣ひとへになど申されたる、こまやかなるやうに侍れば、いささかまさと申すべくや。 / 右 わたうち 唐弓の音高くなけ郭公わが打つ綿もおなじ卯の花 右、綿の色を卯の花と疑ひ見て、音高くなけなど添へられし、上手の歌と聞こゆ。……右勝ちて侍れば、高麗の乱声遅しやとこそ申すべけれ。

【本文】

五十九番

しつめかいとにするてふあさの緒の
よると見ぬまですめる月かな
一むらもくもるとみゆるめなしわた
おなしいろなる月のさやけさ
右、めなし綿は、きはめて白く、きらの侍とかや。されと、あさ絲の哥、心ひくすちなり。以左

しつ―〔類〕賤 いと―〔類〕絲 あさの緒―〔忠〕〔明〕あさの苧
〔類〕麻のを
見ぬ―〔類〕みぬ かな―〔明〕〔類〕哉
一むら―〔類〕一村 くもる―〔類〕曇る めなしわた―〔類〕めなし綿
いろ―〔類〕色
哥―〔類〕歌

為勝。

桜あさの思ひおもはすいかにして
ひとのこゝろをかなひきてみむ

わか恋は心ひとつにしのふ綿

つみしらすへきたよりなければ

左哥、かなひきはよき緒といへり。右、又、しのふ

綿、ともにすてかたし。よき持たるへし。

をうり

ちかきほとに、又、

を舟とをり候へく候。

いか程もめし候へ。

わたうり

わためせ、く。

しのふわた候そ。



〔語注〕

苧からむしは、麻や苧などの茎から取った繊維。これを紡いで糸にする。

綿は、真綿であろう。(木綿が普及するのは、戦国時代から江戸時代にかけて。)『日本職人辞典』(「綿売」の項)、
『中世職人語彙の研究』(「綿売り・めなし綿・しのおわた」の項)、『ヴィジュアル史料 日本職人史Ⅰ』(「綿売」)

注解『七十一番職人歌合』稿(二十八)

桜あさ―〔類〕桜麻

ひとのこゝろ―〔類〕人の心 かなひきてみむ―〔類〕かなひき
てみん

わか恋―〔類〕我恋 ひとつ―〔類〕一つ

つみ―〔白〕つ たより―〔類〕便

緒―〔忠〕〔明〕〔類〕苧 右―〔忠〕〔明〕右は

をうり―〔白〕〔類〕苧売〔忠〕五十九番 苧売

又―〔白〕〔忠〕人

を舟―〔尊〕をに〔白〕〔忠〕おに

いか程も―〔白〕〔忠〕〔類〕いかほとも

わたうり―〔白〕〔忠〕〔類〕綿うり

候そ―〔白〕めせ〔忠〕候そめせ

の項)、『新大系』ともに、真綿と解する。なお、『新大系』付録によれば、『祇園執行日記』に桂宮女、安久利女、鶴松女などの、女性の商人が見いだされる、という。

◎しつめのめかいとにするてふあさの緒の 「緒」は、正しくは「苧」。全体で、序詞的に下旬に掛かる。

◎よると見ぬまでする月かな 「麻の緒の繕る(紡ぐ)」から「夜」と続く。夜と思えないほど、つまり、昼かと思ふほど、月が明るく澄んでいる、というのである。同様の発想の歌は、「菊の上に露なかりせばいかにしてこよひの月を夜と知らまし入隆経▽」(金葉集、三、秋部)など、数多い(二十一番語注「ひるなれや」の項参照)。

◎一むらもくもるとみゆるめなしわた 「一むらも曇ると見ゆる目なし」は、一むらも曇った様子が見えない、の意か。やや不自然な言葉であるが、「めなし綿」に続けるために、あえて用いた言葉か。『新大系』はこを、「少しのむらでも、曇って見える。それほど、目無綿は白く光っている」と解するが、いかが。「めなし綿」は、未考。判詞に、「めなし綿は、きはめて白く、きららの侍とかや」とあるから、白く光沢のある上質の綿であろう。一むらも曇った様子が見えないめなし綿。

◎おなしいろなる月 めなし綿と同じく白く光り輝いている月。

◎きら 綺羅。衣装などのはなやかさ。『日葡辞書』に、「Ora. きれいで光沢のあるもの」とあり、こも、めなし綿の光沢についていうのであろう。

◎あさ絲の哥、心ひくすちなり 「心引く」は、人の心を引きつけること。「筋」は、ある方面の事柄。歌の素材・趣向などについていう。「ありあけの月は、あはれに心ほそきすぢにこそよむめれ、歌合の月のだいはいかがはあるべからむ」(永縁奈良房歌合、月二番判詞)など、歌合判詞にまま用いられる。こは、「引く」、「筋」という「糸」の縁語を用いて戯れたのである。四番右、機織の月の歌に対する判詞、「機絲は心引く筋也」も同様。伝統的な歌合にも、「あをやぎのいと、めでたきすぢに思ひよりはべれど」(弘徽殿女御歌合、二番判詞)のような例がある。

◎桜あさの 「桜麻」は、桜色の花の咲く麻、桜の盛りに蒔く麻など、古来諸説があるが、実体不明。「桜麻の苧生をふの浦波立ちかへり見れどもあかず山梨の花へ俊頼▽」(新古今集、十六、雑歌上)のように、「桜麻の」の形で、多く、

地名「苧生」に掛かる枕詞として用いられた（「麻」―「苧」の縁によるか）。ここは、「思ひ」の「お」を引き出す枕詞として用いている。「麻」は「苧」の縁語。

◎思ひおもはず 相手が私のことを思っていてくれるかどうか。「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる八業平」(古今集十四、恋歌四)などの用例がある。

◎ひとのこゝろをかなひきてみむ 「金引く」は、相手の気を引いて、その反応を試すこと。その「金引き」に、苧麻の異名「金引」を掛ける。金引は、茎の外皮の繊維が苧の材料となる。「金引く」、「金引」ともに、勿論、俗語。

◎わか恋は…… 「我が恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一（五番語注「わが恋は」の項参照）。

◎心ひとつにしのふ綿 人知れず心に秘める意の「心一つに忍ぶ」から、「しのふ綿」と続ける。「しのふ綿」は、陸奥国信夫（現福島市）産の綿か。

◎つみしらす 白石本は「つしらす」とあるが、誤脱であろう。「しのふ綿摘み」から「つみ知らす」と続ける。この「摘む」について、『中世職人語彙の研究』は、「真綿の場合の綿摘とは『帽子綿、小袖、中人、これをつむ。女の業ながらも老女又は小むすめの所作にて、住所閑にしてなさけありげに、しほらしく見ゆるは此わざ也』（人倫訓蒙図彙）という」として、帽子や小袖に入れるために真綿を広げ伸ばすことと解する。傾聴すべき説であろう。ただし、この意味の「摘む」は、中世の用例は管見に入らない。「つみ知らす」は、「抓み知らす」で、相手に恋の苦しみを、身をもって体験させる意か（十二番語注「つみしりぬ」の項参照）。

◎右 忠寄本・明暦板本は「右は」とあるが、誤写であろう。

◎ちかきほとに、又、を舟とをり候へく候 「又」は、白石本・忠寄本に「人」、「を舟」は、尊經閣本に「をに」、白石本・忠寄本に「おに」とあるが、いずれも誤写であろう。「苧舟」は、苧を運ぶ舟であろうが、その実態については、未考。文明ころ天王寺苧座が青苧の特産地である越後まで買い付けに赴き、その購入独占権を保持していたが、明応六年以前には、長尾氏の商業政策によって特権を失い、もっぱら越後苧座による畿内への青苧搬入が行われるようになった、という（『新大系』付録）。

◎しのふわた候そ 「候そ」は、白石本は「めせ」、忠寄本は「めせ」の右に「候そ」と校合する。「候」は、「にさうらふ」の転で、「ゾウロウ」、「ゾウロ」、「ゾウ」のように濁音であったと思われる。しのふ綿でございます。

〔絵〕

苧壳は、無帽で髪を束ね、小袖、袴姿。前に、苧を詰めたと思われる俵。

綿壳は、桂巻をし、小袖を着る。『ヴィジュアル史料 日本職人史〔I〕』によれば、右に束ねられている四角いものは、くず繭を木の枠や板の四隅に打った釘などにかけて、指でひきのばして重ね合わせ、正方形にした角綿で、その手前のもっと手に持っているものとは、半円形の袋状の袋綿か、という（「綿壳〔一〕」の項）。前に、棹秤。

〔参考〕

○ 上が上にと思ふかの国

重ねたる筑紫の綿も寒き夜に

△宗伊▽

（新撰菟玖波集）

○また、非常に質のよい、たいへん細い生糸屑が多量にあつて、甚だ繊細であり、手ざわりもよく、気持ちよく、この上なく暖かいので、冬に詰め綿の用をする。それでまた一種の頭巾を作つて、冬に頭にかぶるのに使い、また、それを首に巻いて、タルターリア人やコーリア〔朝鮮〕人やシナ人が冬に用いる種々の獣の毛皮の代りにする。

（日本教会史、一卷、七章）

六十番 薫物売 葉売

〔職人尽〕

〔吾吟我集〕 寄香恋 胸にたく思ひの煙きまら伽羅ならば香をしるべにも訪はれん物を / 寄葉恋 ともすれば生けつ殺しつ
気の毒も氣の薬もや君の配剤 〔後撰夷曲集〕 木葉屋 磯の亀ふるき都の薬屋に甲計こそ昔よりあれハ元成 / 〔人倫訓
蒙園彙〕 葉種屋 一切草木鳥獸にいたるまで、葉種数をつくして唐土より渡し、其の外、和国の葉多く貯へてこれを商ふ
也。葉の数、本草綱目、一千八百九十二種あり。神農本経には、三百六十五種あり。〔誹諧職人尽〕 薫物売 身にしむ
や香炉の煙秋の風ハ徳元 / おぼろ月薫物売がしめりかなハ才磨 / 売りながらたき物ひめへたむけ哉ハ貞鶴 / 風暑し
薫ものうりが鼻の先ハ硯寿 / 南よりたき物売も来たるかもハ和圭 / 夜ぐたちに誰が薫物ぞ星迎へハ寥和 / 葉売
松脂はただ膏葉の子の日哉ハ貞徳 / 見るは目の薬となりの壺すみれハ正成 / 聞くや聞かぬ初ほととぎす葉うりハ杉国
 / 蛤も栗も夜声やくすり売ハ麦仙 / 雪の夜や道正庵をたく音ハ寥和 / 〔職人尽発句合〕 五番右 葉種師 艸も木
も是葉なり春の雨 春雨のうるほひに、草根木皮の葉となるといふは、匂ひも深く聞きもよければ、勝ち侍るべし。「阿
蘭陀船も入りたり」 〔難波職人歌合〕 下六番左 葉種屋 手弱女のかりの色香になるる身のうときをいとど忍ばざらめ
や 右の方人云、此の歌は心あまりて詞たらざるか。聞きとり難し。左がたこたふ、兼好の徒然艸にも云へる如く、女は
かりの色香をよそほふ。其のいろかとする薬にのみなれて、中々に女にうときを云へるなり。……判に云、左の歌、聞こ
えざるにはあらねど、よき歌ともいひ難かるべし。右の歌、……いみじき勝と云ふべし。 / 下二十三番右 葉湯店
恋の病いゆるくすりのゆもあらばふねにたたへてあみてましもの 左の方人云、歌はよしとも聞こえざれども、心はかく
れたる所なければ、べちにあげつらひなし。判に云、……右の歌も、たくみながらに安らかにて、わろからねど、猶左の
かたをかちといふべし。

【本文】

六十番

ゆふまとひする人もなしかなうすの

月の夜こゑのかしかましさに

つきはかり目にかけてこそあかしけれ

よるはくすりのうりかひもなし

左、梅か枝の巻に、かなうすのをと耳かし

かましきころなり、といへるも、月の夜

こゑに思よそへられて、やさしく聞ゆ。右は、

はかりをかくし題によまれたるにや。されと、

左哥にはかけても及かたし。可為左勝。

わかためのほひにもせはたき物の

およふやあるといひやりてまし

くすりうる唐人とてや恋しとも

いふ事をたにき、もしらぬは

此番、さしても聞えず。たき物も葉もとり

合て、為持。



たき物うり

すいふん、この

かうとも、えりと、

ゆふまとひ―〔類〕夕まとひ

夜こゑ―〔類〕夜声

つき―〔類〕月 目―〔類〕め

くすりのうりかひ―〔類〕葉の売かひ

ころ―〔類〕比

思よそへられて―〔類〕よそへられて

にや―〔白〕かや

わかため―〔類〕我為

およふやある―〔忠〕〔明〕〔類〕おようやある

くすり―〔類〕葉

き、もしらぬは―〔類〕聞もしらぬはイに

たき物―〔類〕薫物 とり合て―〔類〕取合て

たき物うり―〔白〕〔類〕薫物うり〔忠〕六十番薫物うり

すいふん―〔白〕〔忠〕〔類〕随分 このかうとも―〔白〕〔忠〕此香とも

〔類〕此かうとも

えりと、のへたれは―〔白〕〔忠〕えり調たれは

のへたれば、此ゆふ
くれのしめりに
おもしろき。

くすりうり

御薬、なにか御用候。

にんしん、かんさう、

けいしん候。ちんも候。



〔語注〕

薫物は、沈香・白檀などの香木の粉を蜜や甘葛などで練り合わせた香料。燻らせて着物に焚きしめるなどする。葉は、今でいう漢方薬。画中詞から判断するに、生薬を指すらしい。

◎ゆふまとひ 夕惑。宵の口から眠くなること。また、眠りこけること。「待ちわびて騒ぐ心のゆふまどひ寝るとはなくて寝られもやせんへ信実」(新撰六帖、五)など、和歌に稀に用いられる言葉。

◎かなうすの月の夜こゑのかしましさに 判詞にも言うとおり、『源氏物語』梅枝巻の、「かたがたに、香ども選りととのへて、鉄臼のおと、耳かしかましきころなり」を本文とする。「鉄臼」は、香料を搗き砕くの用いる、鉄製の小さな臼(絵参照)。「鉄臼の搗き」から「月の夜声」と続ける。「月の夜声」は、月夜に聞こえる声・音。歌には例がないが、謡曲「山姥」に、「しばさせ給へ。とてもさらば、暮るるを待ちて、月の夜声に謡ひ給はば、われも亦、真の姿を現すべし」とある他、同「佐保山」、「逆矛」にもこの語が見える。

◎つきばかり 「月ばかり」の「ばかり」に、薬の縁語「秤」を掛ける。

◎目にかけて 「目に掛く」は、それと注意して見ること。その意に、薬の縁で、目方を量る意を掛ける。(ただし、

此〔類〕この ゆふくれー〔白〕〔忠〕〔類〕夕暮
にー〔白〕そ

くすりうりー〔白〕〔忠〕〔類〕薬うり

御薬ー〔白〕〔忠〕御くすり なにかー〔白〕〔忠〕何か

にんしんー〔白〕人参〔忠〕人蔘 かんさうー〔白〕〔忠〕かん草

けいしん候ー〔白〕〔忠〕桂心も候 ちんも候ー〔忠〕ナシ

後者の意の「目に掛く」は、近世以降の用例しか管見に入らない。前者の意では、「はるかなる三上の嶽を目に掛けていく瀬わたりぬ野洲の川浪へ良経」(新勅撰集、十九、雑歌四)など、歌に用いられるが、後者の意としては、勿論、俗語。

◎よるはくすりのうりかひもなし 夜、葉の売買をしない慣習であつたかどうかについては、未考。暇にあかして月を見ている、というのである。

◎思よそへられて 忠寄本は、単に「よそへられて」とするが、誤脱であろう。「思ひよそふ」は、思いなずらえること。歌合判詞に、「かのもうごしの洞庭湖之山庵に風上の湖あきさえたりけむ景色も思ひよそへられて」(建長八年百首歌合、百六十八番判詞)など、「思ひよそへられて」の形でまま用いられる。

◎やさしく聞ゆ 「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう(和歌大辞典「やさし」の項)。

◎はかりをかくし題によまれたるにや 「にや」は、白石本は「かや」と読めるが、誤写であろう。「隠題」は、歌学用語で、物の名を、その意味に関係なく、語呂合わせで詠み込むこと。ここは、「月ばかり」の「ばかり」に「秤」を掛けたことをいう。

◎かけても 全く。歌に「目に掛けて」とあることから、それを茶化して言ったのである。

◎わかためのにほひにもせは (あの人が薫物を)私(と逢うとき)のための匂いにでも使ってくれるのならば。実は他人のために使うのだ、という意を含む。

◎たぎ物のおよふやあるといひやりてまし 「御用やある」は、四十一番すあひの恋の歌にも、「思ふ事人に伝ふる道ならで御用やあるといふはよしなし」と見える。すあひと同じく、ここも実際には「御用やさうらふ」などと言って注文を取ったものと思われるが、それを和歌らしく言い換えた表現であろう(四十一番語注「およふやあるといふはよしなし」、「御よふやさふらふ」の項参照)。薫物の御用はございますかと、きつと言いやるところだ。実は、相手がつかない以上そんなことをしても無駄だ、という気持ち。

◎くすりうる唐人とてや 「唐人」は、『新大系』に「からひと」と読むが、「たうじん」と読むべきかも知れない。中国人。『新大系』に、『北条記』二・外郎事に見える、外郎という薬売（先祖が中国から渡ってきたという）を紹介している。実際に渡来した中国人が薬を売っていた事実があったかと思われるが、その詳細については、未考。私が唐人だからであろうか。唐人であることを口実として、のニユアンス

◎恋しともいふ事をたにき、もしらぬは 「き、もしらぬは」は、類従本は「聞もしらぬに」とし、「に」の右に「はい」と校合する。「聞き知る」は、聞いて理解する、ここではすなわち、ある言葉の意味が分かる、の意。それに、聞き入れない意を掛ける。「聞き知る」に本来、後者の意はないが、あえて強引にこじつけたのである。「は」は、感動を表す助詞。「恋しい」という私の言葉さえも、相手に通じない。

◎とり合て、為持 「とり合て」を『新大系』は「とりあひて」と読むが、「とりあはせて」と読むべきであろう。「取り合はす」は、比較するの意で、本職人歌合では、左右の歌を比較した結果、優劣のない場合に用いている（四十一番語注「とり合て、為持」の項参照。ここは薫物や薬を調合する意に掛けて茶化したか。

◎すいふん、このかうとも、えりととのへたれば 前掲『源氏物語』梅枝巻の「香ども選りとのへて」を意識した言葉か。「選りとのふ」は、選りすぐること。

◎此ゆふくれのしめりにおもしろき 「しめりに」の「に」は、白石本は「そ」と読めるが誤写であろう。『源氏物語』梅枝巻の源氏の言葉、「このゆふぐれのしめりにこころみん」による。「湿り」は、いわゆるお湿り（『源氏物語』では春の小雨）。薫物は湿っていると匂いが強くなる。

◎にんしん 人參。朝鮮人參のこと。根を強壯薬として用いる。

◎かんさう 甘草。マメ科の多年草。根を解毒・鎮痛薬などとして用いる。

◎けいしん候 白石本・忠寄本は「桂心も候」。「桂心」は、クスノキ科の常緑高木「肉桂」の異名。また、その樹皮の一部（桂心）と「肉桂」を区別する説もある。ここは、後者。健胃・強壯薬などとして用いる。

◎ちんも候 忠寄本はこの言葉を欠く。「ちん」は「沈」で、「沈香」の略。ジンチョウゲ科の常緑高木。また、その

樹脂を集めて作った香料。ここは、後者。鎮静薬などとしても用いる。

〔絵〕

薫物売は、垂髪で小袖を着、棹秤を持つ。前に、香木の粉を入れた箱と丸い器。(手前の丸い器は蜜を入れるか。)香を練り合わせるための鉄臼と杵。後ろに、脱いだ打掛。白石本・忠寄本は、箱や器の描き方に小異。

薬売は、烏帽子、直垂、袴姿で、腰刀を差し、箱の紐を解くところ。前に棹秤。左に袋二つ。袋には文字を書いた様子。白石本・忠寄本・類従本は、袋の文字は描かない。

〔参考〕

○われらの香料や薬は、乳鉢または臼のなかで搗りつぶす。日本では、両手に鉄の輪を持ち、銅製の舟型容器フネガのなかで搗きくだく。
(日本覚書、九)

○われらにおいては、真珠と小粒の真珠とは人びとの装身に用いる。日本では、薬にするために搗りつぶすよりほかに用途はない。
(同)